

学会参加レポート

25th International Society for Neurochemistry 国際神経化学会に参加して

古澤孝太郎

(首都大学東京 理工学研究科 生命科学専攻 神経分子機能研究室)

オーストラリア・ケアンズにて、2015年8月23日から27日にかけて25th International Society for Neurochemistry 国際神経化学会が開催されました。今回、その参加レポートを執筆する機会を頂きましたので、ここにご報告いたします。

International Society for Neurochemistry (ISN) は、Journal of Neurochemistry を機関誌として発行している学会です。この学会は、神経化学の発展や、神経の研究に携わる若手研究者の育成を目的としています。ISNの大会が開催されるのは2年に1度で、American Society for Neurochemistry (ASN)、European Society for Neurochemistry (ESN)、若しくは Asian Pacific Society for Neurochemistry (APSN) 等の地域性の高い学会と合同で行われます。2015年の今大会は APSN と ASN との合同でした。

5日間に渡る大会のプログラムとして、Symposium、Young Scientist Lectureship、Plenary Lecture、Workshop、そして Poster Session 等が用意されていました。神経化学の大会ですが、その研究領域は幅広いので、自分の研究テーマから少し離れた研究についても聞くことができ、非常に刺激的でした。口演内容は、アルツハイマー病、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症をはじめとする神経変性疾患、そして、自閉症、てんかん、統合失調症といった脳神経疾患に関する話題が多く、病理に関するセッションは全体の半分を占めていました。このことから、神経化学の研究を通して、疾患の原因究明や、治療法の開発に貢献することが以前にも増して強く求められていることが分かります。これに加えて、グリア細胞にフォーカスした研究も多く、シンポジウムの4分の1近くにも上りました。グリア細胞そのものの目的を絞るのではなく、グリア細胞が神経保護、神経突起伸長、神経回路制御等に及ぼす影響を解析しており、グリア細胞と神経細胞が協調的に働くことにより、脳という器官を作り上げ、維持していることを示す内容が多数でした。さらに、グリア細胞と神経疾患の関連を示す研究も少しずつ増えてきた印象を受けました。

私は現在、神経突起伸長を制御するリン酸化シグナルについて興味を持って研究を行っているのですが、自分の研究の発展に繋がる様な発表もいくつか聴くことができました。その中でも、いくつかのキナーゼが協調的に作用しながら発生中の樹状突起の再構築を制御する話や、軸索輸送を介した長い距離に渡るシグナル伝達の話等はとても興味深く、自分の研究の参考になりました。

私は、24日と25日の2日間、それぞれ2時間ずつポスター発表を行いました。発表のタイトルは、“Cdk5 regulates Rab8-dependent axonal outgrowth via phosphorylation of Rab8 guanine-exchange factor GRAB” でした。この研究は、脳キナーゼである Cdk5 による GRAB (Rab8 の GEF) のリン酸が、

軸索伸長を制御するという内容です。発表に関しては、国際学会ということもあり、慣れない言語を用いて分かり易く説明する難しさを感じながらも、多種多様な研究テーマを持つ研究者が立ち寄ってくれたことから、様々な視点からの意見がもらえるだけでなく、自分のプレゼンテーション能力の向上にも役立ちました。この発表を通じて様々な研究者と意見交換をすることで、自分の仮説の実証方法の正当性や、研究の方向性を再確認することができました。

最後に、私はこの学会を通じて、自分の仕事をアピールすることや、研究者の知り合いを増やすことができ、とても素晴らしい経験をさせてもらったと感じております。日本神経化学会、そして国際対応委員会の先生方に対し、この場を借りて厚く御礼申し上げます。